

# 遊び込む幼児の姿とは

## — 主体的に遊ぶ幼児の様子を探る —

学籍番号 199214  
氏名 高塚 郁実  
主指導教員 中橋 美穂

### 1. 問題と目的

幼稚園教育要領解説(文部科学省, 2018)では「幼児の遊びには幼児の成長や発達にとって重要な体験が多く含まれている(p. 34)」と明記されている。また、幼児が遊びを持続し発展させ遊び込むことで楽しさや達成感を味わい、物事をやり遂げようとする気持ちを持つことが自立心を育む上で大切とされている。幼児は遊びに没頭し、充実感や満足感を味わう、つまり「遊び込む」ことで、生きる力の基礎を培っている。そのため教師は、幼児を理解することを通して幼児に必要な体験が積み重ねられるよう環境構成や保育者の援助を行う必要がある(文部科学省, 2018)。では、幼児は実際にどのような遊び込む姿を見せるであろうか。また、ただ遊ぶだけでなく、遊び込むことが重要とされるが、「遊び込む」ことで具体的に育まれる「生きる力」とはどのような力なのか。これらのことを課題として、本研究では以下の視点で調査し考察する。

- 1、遊び込む幼児はどんな姿であるか、また遊び込むためにはどのような要因や要素が存在するのかを明らかにする。
- 2、1を明らかにすることで見えてくる教師に必要な援助や環境構成について考察する。

上記2点を研究目的とし、観察調査と聞き取り調査の実施を通して、研究の目的の達成に向け取り組む。

### 2. 方法

本研究では、前章の目的を達成するためにX幼稚園に依頼し、観察調査と聞き取り調査の2つの調査を行った。調査協力園であるX幼稚園では、幼児期の遊びとは生活そのものであると捉えられている。幼児一人一人が興味・関心のある遊びを自ら選び、挑戦し、工夫・発展させる経験は、知的好奇心を育て、人として生きていく社会性、道徳性を身につけていくと考え、日々保育を計画し実践している。

方法としては、エスノグラフィーの手法を活用し、仮説生成型研究を行なった。観察調査の中で見られた幼児の遊ぶ姿や言動、行為、遊びの展開を解釈することで、幼児にとって遊び込むとはどのような姿であるのか、またそのような状態になるためには何が必要で、どのような外的アプローチが成されているのかを解明する本研究にとって、エスノグラフィーの手法を用いることは最適だと考える(柴山, 2006)。教師の援助、介入内容や頻度、幼児の年齢や教師の保育経験年数によるそれらの変化から全体的な傾向は把握されてきたものの、教師の援助によって幼児に何がもたらされているのかは明らかになっていな

いという指摘がある(水津・松本, 2015)。このことから本研究では、教師のどのような援助や関わりが、幼児が遊び込む状況となるために必要であるかを明らかにするために、教師への聞き取り調査も実施する。非参与観察をする上でフィールドとして「砂場遊び」を選んだ。理由としては、自由度が高く多面的に幼児の遊ぶ姿を捉えることができることや、体全身を使って遊ぶプロセスが客観的に捉えやすいことなどが挙げられる。

### 3. 結果と考察

観察調査の結果から、幼児の遊び込む姿とは、幼児自らが主体となって遊びに取り組み、試したり予想したりする中で様々な気づきを得ながら発展や応用を行い、遊びを継続していく姿のことをいうと見出した。収集した事例では、遊び込む要因として興味・関心や意欲、試す、予想、気づき、遊びの継続などのワードが読み取れた。中でも、「気づき」というワードは特に多く読み取れ、遊び込むためには、イメージ的な気づきや科学的な気づき、発見、応用など、自分なりに気づくという経験が必要となってくると考える。また、幼児は何か気づくことで「心動く経験」をしている。遊びという活動の中で幼児は様々な事象に対して興味や関心を持ちながら、さらに遊びを充実させたいという高揚感を意欲につなげていくという展開が繰り返されており、幼児が遊び込む姿となるためには、主体的な活動だから得ることのできた気づきに対して「心動く経験」をしていることが最も重要なのだと考察する。幼児は、「気づく」ことで心動く経験をし、「心動く経験」を通して気づきを広げたり深めたりしているのだろう。興味関心、「なんでだろう」「知りたいな」という思い、意欲や自己課題を持って遊びに取り組むとき、子どもは実に「主体的」に行動する。従属的や指示待ち的ではなく、自ら遊び始めたり、いろんなことに気づいたりしていくこと、それが主体的な姿であり、主体的であるからこそ、遊びにのめり込んでいく状態が生まれるのだろう。すなわち、それが「遊び込む幼児の姿」なのだろう。

次に、聞き取り調査の結果から、教師の援助は「幼児への理解」からスタートするということを見出した。幼児理解の次は「幼児を取り巻く環境への理解」である。ここでの環境とは、幼児の遊ぶ遊具や場所などの物的環境、さらに友達や教師といった人的環境などのかかわりの対象を指す。幼児理解と同時に、幼児に関わる遊具や空間、素材、時間などの環境の持つ特性への理解もまた幼児を理解する上で必要となってくる。意図的かつ計画的に環境を構成することは、幼児の興味の広がり、遊びの継続、遊び込む状況へとつながることが明らかになった。子どもがやってみたいと思える遊びに出会えるように、また、その遊びをおもしろいと感じられるように、適切に環境を構成することは教師の役割であり、また、遊びがおもしろくなるように考えたり工夫したりする力をつけるよう、心動く経験ができるよう、適切に援助することも重要な役割である。幼児一人一人に、またその場面に合った適切な援助のもと、子どもたちは遊びを変化させていくプロセスのなかでさまざまな体験を積み重ね、学びを深めていくのである。